言葉のしんそう（深層・真相）
――大庭幸男教授退職記念論文集――

The Deep/True Phase of Language
Essays Presented to Professor Yukio Oba
on the Occasion of His Retirement
from Osaka University

目　次

はしがき …… i

動名詞における時の解釈と経済性……有村　兼彬　3

英語における二重前置詞句による経路表現 …… 米山　三明　15

There 構文と場所句倒置構文 …… 高見　健一　27

普遍文法と人間言語の多様性 …… 福井　直樹　39

意味拡張，項融合そして強要 …… 大室　剛志　57

英語における時制の一致の諸特性と時制解釈 …… 金子　義明　71

問い返し疑問文の節構造 …… 西岡　宣明　83

家庭の呪縛
——禁酒小説における「離婚」の不在—— …… 森岡　裕一　95

ジャマイカと女たち
——サリー，コン，バーサ—— ……服部　典之　107

アダプテーション，リメイク，リニューアル
——物語更新理論の構築に向けて—— …… 片渕　悦久　123

小説の非人間化
——ポストモダニズムとポストヒューマン—— …… 石割　隆喜　137

The True Face of Jesus …… Paul A. S. Harvey　149

OE byrðen “bur*d*en” vs. fæ*d*er “fa*th*er”
——英語史に散発的に見られる［d］と［ð］の交替について——
……神山　孝夫　155

具体物を表す「名詞＋動詞」複合語の解釈メカニズム
……由本　陽子　167

植物と名付け
——日本語の複合名詞を中心とした概観——……松本マスミ　181

———————— . ————————

Beowulf にみられる否定辞 ne について……加藤　正治　193

An Experimental Study on VP-ellipsis in Japanese …… Mari Takahashi　203

前置詞つき数詞と名詞句……前川　貴史　215

Intervention Effects in Japanese Wh-questions …… Naoko Komoto　227

日本語における節比較構文の容認可能性条件について
……吉本真由美　239

———————— . ————————

不完全な被格付与子としての与格と語彙的受動態……田中　裕幸　251

wh 修辞疑問における島の効果についての覚え書き……藤井友比呂　263

Remarks on Argument Realization and Optionality in Syntax
…… Koji Kawahara　275

動詞的前置詞とその周辺……村田　和久　285

A Note on the Clausal Typing Hypothesis:
A View from Kaqchikel…… Yusuke Imanishi　295

虚辞 it と that 節について …… 本田　隆裕　307

Agreeing Type ‘*e*’ …… Koji Shimamura　319

A Note on the Escape Hatch:
Toward an Ordering Theory of Transfer ……Hideharu Tanaka 335

程度修飾表現の意味
──*very, much, well* と「とても」「よく」── ……濱本　秀樹 349

動詞句における度量句の分布とスケール構造 …… 田中　英理 361

On *Ni/E* Alternation in Japanese…… Sumiyo Nishiguchi 373

Milton の叙事詩的比喩とメタファー認識 …… 大森　文子 385

Supposing による脱従属化
──発話行為文の発生について── …… 早瀬　尚子 399

get-passive の特性と通時的成立に関する考察 …… 谷口　一美 411

同族目的語構文における限定詞の働きについて …… 堀田　優子 423

V *the* N *out of* NP 構文の誇張解釈について …… 高木　宏幸 435

発話行為の can …… 米倉よう子 447

コントロールサイクルと被害性
──被害受身の概念構造── …… 町 田　章 461

Used to Be の構文化に関する一考察 …… 岩崎　真哉 475

基準述語 (criterion predicates) について ……南　佑 亮 487

How Humor is Interpreted:
Relevance Theory vs. Blending Theory …… Sachiko Kitazume 499

発話の推意と推論規則 …… 吉村あき子 513

複合的プロセスとしてのアイロニー …… 春木　茂宏 525

「ちょっと」とフェイス保持の関連について …… 千 田　愛　537

英語における具体名詞の中核的意味とメタファー表現
…… 岩橋　一樹　549

Contrary to 句の解釈におけるコントラスト …… 黒川　尚彦　561

疑似同定文としての「人魚構文」…… 梅原　大輔　573

Fail to 不定詞の意味論 …… 田岡　育恵　585

名詞の語彙概念拡張の歴史的変遷に関する初期的調査
…… 岡田　禎之　597

経路指示文における副詞的要素の配置と
experiential iconicity …… 甲斐　雅之　609

日英語の否定命令文
――命令文と否定辞の共起性―― …… 森　英 樹　621

It Extraposition and Locative Inversion Constructions in
Pedagogical English Grammar …… Yuya Ohkawa　633

“Stative Progressive” in Western Japanese Dialects …… Kimiko Hirakawa　643

文頭の *It*-Cleft 構文の使用制約 …… 藤原　弘樹　655

大庭幸男教授略歴と業績 …… 665

感謝のことば …… 大庭　幸男　673

あとがき …… 677

執筆者一覧 …… 680

OE byr*ð*en “bur*d*en” vs. fæ*d*er “fa*th*er”
──英語史に散発的に見られる [d] と [ð] の交替について──

神山　孝夫

英語子音の保守性

ゲルマン語が成立する過程においてはGrimmの法則ないし第1次子音推移 (G. die erste Lautverschiebung) に代表される劇的な子音変化が生じた．その後，ゲルマン語内に生じた分化過程において，北ゲルマン語はHoltzmannの法則，次いで語末における無声化やrhotacism等を経験し，西ゲルマン語の中でも高地ドイツ語においては再度大規模な第2次子音推移 (G. die zweite Lautverschiebung) が生じた．だが，その他の西ゲルマン語において生じた子音の変化は比較的小規模なものにとどまるように思う．その一派である英語の場合にも，古英語から近代英語に至るまでの間に観察される子音の変化は通時音韻論の一般的傾向に沿った，いわば素直なものである場合が多い．

一見したところ，古英語から近代英語に至る過程で大きく形を変えているような印象を与える語も散見される．だが，その印象のかなりの部分はノルマン人の征服以降に古英語の書記法の伝統が絶たれ，ノルマン・フレンチ風の新たな，そしてしばしば統一性を欠く綴りが導入された点にあり，綴りの違いに惑わされることなく想定される音声実現と周辺事情に注視すれば，その多くは音声変化の一般的傾向と，いわば英語の「癖」に従った小規模な変化とみなすことができる．

一例に早期のOE hlāfweardとModE. lordを見比べれば一見両者の隔たりは大きい．だが，子細にその歩みを検討すれば，その隔たりが微細な変容の積み重ねによることがわかる．OE hlāfweardは hlāf[1] [xlɑːf] (> ModE. loaf) と weard[2] [weard] (> ModE. ward) から成る複合語であって，使用人を含めた一家の食事を管理する者，すなわちG. Brotherr (< Brot “bread” + Herr “master”) と同じ発想によって，その家の主を表した．初期においてhlāfweardは [ˈxlɑːfweard] と発音されたはずだが，2要素が溶け合うに従って，母音間の [f] が同化により有声音の [v] となり，また強勢位置を外れた第2音節の二重母音 [ea] が弱化し，先行する [w] の後舌性と円唇性をも取り込んで後舌円唇母音を発達させたと考えられる．こうして古英語に文証される通常の形態 hlāford [ˈxlɑːvord] ないし hlāfurd

[ˈxlɑ:vurd] が得られる．

次の時代には，ここから語頭の h が失われた．ゲルマン語の h は印欧祖語の無声軟口蓋閉鎖音 *k にさかのぼるから，その本来の音価は無声軟口蓋摩擦音 [x][3] と考えられる．英語の歩みの中で母音の後では暫時その本来の音価，ないしは隣接するのが前舌母音である場合には調音位置を前進させた硬口蓋音 [ç] が保たれる[4]ものの，マルティネの言う言語の経済性に従い，その他の位置においては徐々に弱まって声門摩擦音 [h] に転じてしまう．この推移が進行するに従い，語頭の hl- における h の発音が徐々に困難になって脱落することは充分に予想されることである．[5] こうして OE hlāford ～ hlāfurd は語頭の h を失い，また OE æ [æ] の後舌化に呼応して第 1 音節の母音 [ɑ] が [ɔ] へとやや円唇・狭音化し，弱化母音が e [ə] に統合される過程を経て ME louerd ～ loverd [ˈlɔ:vərd] へと至る．[6]

その後，Jespersen (1909: 41) が睨むように，[v] が恐らく [u] に類する母音ないし [w] の段階を経て失われ，ME [ˈlɔ:vərd] より ModE. lord に到達する．実際，この現象が生じる音声環境や形態論的な条件等を厳密に規定することは難しいが (cf. e.g. Jordan 1925: 190)，母音が先行する語中の [v] が同化を経て失われる過程も英語史においてめずらしくない．OE hlæfdiġe[7] [ˈxlæ:vdije] > lady，OE heafod [ˈheavod] > head，OE hafoc [ˈhavok] > hawk，OE lāferce [ˈlɑ:verke] ～ lāwerce [ˈlɑ:werke] > lark や OE wīfmenn [ˈwi:fmen:] > [ˈwi:vmen:] > ME wimmen > women [ˈwɪmɪn][8] 等においても，OE hæfde [ˈhævde] > had あるいは never や ever の詩語 ne’er, e’er 等々にも見られる，かなりありふれたことである．

確かに英語はこの千余年にわたって形態，統語，語彙の側面，さらには音韻面でも母音において極めて大きな改変を経験してきた．だが，こと子音に限って言えば，歴史言語学的に英語はかなり素直な，保守的性質を示すと言い得る．

例外的な d / ð (th) の混乱

古英語の d や ð (th) もその例に漏れず，原則として今日まで保存されている．例えば OE brō*ð*or と ō*ð*er は ModE. bro*th*er と o*th*er に素直に受け継がれており，かつての ð (þ) が th と綴られ，また r の基本的な音声実現が歯茎ふるえ音 [r] から歯茎接近音 [ɹ] に転じ，語末では半ば失われたとはいえ，基本的に両者の間に子音の変化はない．また OE hlāfwear*d* > ModE. lor*d* の末尾や OE un*d*er > ModE. un*d*er 等々の語中にも見られるとおり，d も古英語から今日までそのまま保たれている．

だが，もともと ð [ð] を含んだ OE byrðen は ModE. bur*d*en に，d [d] を含んだ OE fæ*d*er は ModE. fa*th*er に至っている．小生の把握する範囲で類例は次表に記

す 22 語にものぼり，これらすべてを突発的に生じた例外的現象の反映とみなすことは不適当に思われる．では，OE d が ModE. th に，また逆に OE ð が ModE. d に転じたのは，どのような経緯によるのであろうか．以下，検討の結果を略述する．

OE ð [ð]	ModE. d [d]	OE d [d]	ModE. *th* [ð]
byr*ð*en	bur*d*en	fæ*d*er	fa*th*er
cū*ð*e	coul*d*	ga*d*(e)rian	ga*th*er
Cū*ð*(wi)nes dūn	Cu*dd*esdon[9]	ġear*d*	gar*th*[θ] (～ yar*d*)
fi*ð*ele	fi*dd*le	hi*d*er	hi*th*er
ġefor*ð*ian	affor*d*	hwi*d*er	whi*th*er
mor*ð*or	mur*d*er	mō*d*or	mo*th*er
nǣ*ð*l	nee*d*le	swear*d*	swar*th* [θ] (～ swar*d*)
rō*ð*or	ru*dd*er	ME te*d*er	te*th*er
spī*ð*ra	spi*d*er	tōgæ*d*(e)re	toge*th*er
sta*ð*ol	sta*dd*le	þi*d*er	thi*th*er
swæ*ð*el	swa*dd*le	we*d*er	wea*th*er

19 世紀末における見解

19 世紀までの英語語源学の成果はケンブリッジの **Walter William Skeat** (1835-1912) によって総括されていると言えよう．しかし，問題の現象については当時まで有力な説明は知られていなかったらしく，勢い彼の歯切れも悪い．

彼 (1887: 367ff.) はまず 12 世紀頃生じた [ð] > [d] の推移について該当例（上表左欄）の多くを挙げつつ説明を試みるが，この推移の原因については堅く口を噤む．遠因の 1 つとして OE byrðen > ME burthen[10] ～ burden が ModE. burden の形で固定するにあたっては，低音の伴奏，つまり今風に言えば bass line を表す burden (< F. bourdon) との連想も一役買っている可能性について触れるのみである．[11]

他方，15 世紀頃に生じた [d] > [ð] の推移を扱う際 (1887: 369f.) には彼は一歩踏み込み，同様に該当例（上表右欄）の大半をリストアップしつつ，英語史において [d] が th [ð] に散発的に変化した潜在的な要因として以下の (1) と (2) を指摘する．この speculation は先に生じた [ð] > [d] にもかかわると見てよかろう．

(1)　Verner の法則に起因する d と ð の混乱
(2)　古ノルド語の影響.

Verner の法則と d / ð の交替

無論，(2) の要因は無視できない．現に，かつて Danelaw 地域であったイングランド北部に残る ModE. garth が ON garðr に由来することは明らかであり，由緒正しい OE ġeard は規則的に ModE. yard をもたらす.[12] また OE sweard「表皮」も規則的に ModE. sward[13] に至り，方言に残る ModE. swarth は ON swǫrðr の影響で生じた異形と考えられる.[14] しかし，該当例は他に見当たらず，英語史に生じた d/ð (th) の交替における古ノルド語の影響は極めて限定的だと断じてよかろう.

他方，(1) の要因について吟味するには，まずゲルマン語の発達における Verner の法則の作用について確認しておかねばならない.

最初に印欧祖語とゲルマン祖語の子音の基本的な対応関係（Grimm の法則）を下表に整理しておく.[15] 右欄では想定される最古の音価を IPA で明示した.

PIE					Gmc.			
p	t	k	k^w		ɸ	θ	x	x^w
(b)	d	g	g^w	→	(p)	t	k	k^w
bh	dh	gh	g^wh		β	ð	ɣ	$ɣ^w$

上表 1 行目では印欧祖語の無声閉鎖音がゲルマン語の同器官的な無声摩擦音に転じる推移が表されている．だが，この推移には一連の例外が見出される.

PIE *t について例示すると（母音についての説明は略す），例えば下記は Grimm の法則に合致し，また後に生じた有声音間での有声化を考慮すれば OE brōðor [ˈbroːðor] 等もこれに矛盾しない.

PIE *bhrā́tēr[16] (cf. Skr. bhrā́tā, Gk. φρᾱ́τηρ)
> Gmc. *βrōθēr > Goth. brōþar [ˈbroːθar]

だが，古く第 2 音節にアクセントを持った下記は文証される Goth. fadar [ˈfaðar] も，さらには後の OE fæder [ˈfæder] 等をも正しく導くことができない.

PIE *pətḗr (cf. Skr. pitā́, Gk. πατήρ) > Gmc. *ɸaθḗr > Goth. *faþar [ˈfaθar]

これに類する一連の不備が露見していたために，この法則の真の第一発見者であった Rask (1818: 170f. = 1932: 188ff.) は逡巡を示し，他方これに触発されて自

著 (1819) を大きく改訂した Grimm (1822[2]: 595) に発見者としての名声と法則に冠する名を奪われることになったのであった．

Grimm の法則によって無声摩擦音が期待される位置に，例えば「父」にあたる語には，どのような経緯から有声音が現れるのか，この疑問解決のためには様々な試みが行われた．そして，半世紀以上を経てようやくその答えが示された：

> Indogerm. *k*, *t*, *p* gingen erst überall in *h*, *þ*, *f* über; die so entstandenen tonlosen fricativae nebst der vom indogermanischen ererbten tonlosen fricativa *s* wurden weiter inlautend bei tönender nachbarschaft selbst tönend, erhielten sich aber als tonlose im nachlaute betonter silben. (Verner 1877: 114)

> 印欧祖語の k t p は，最初すべて h þ f【*i.e.* x θ ϕ】に移行した．こうして生じた無声摩擦音は，印欧祖語から受け継がれた無声摩擦音 s とともに，語中で有声音の間に位置する場合にはそれ自身も有声音【ɣ ð β】となった．だが，アクセント音節に後続する場合には無声音【x (> h) θ ϕ (> f)】にとどまった．（神山試訳）

この解答を提示したのは，後のコペンハーゲンのスラブ学教授（当時はハレの図書館司書）**Karl Verner** (1846-1896) であった（脱稿は 1875 年 7 月）．これによって得られる Gmc. *ɣ *ð *β は PIE *gh *dh *bh の反映と合一し，その後，英語の祖先となった西ゲルマン語方言では有声閉鎖音 g d b に転じたと考えれば，[17] 上記の Goth. fadar [ˈfaðar] も OE fæder [ˈfæder] も矛盾なく導かれることになる．

以上の前提のもとに，Skeat (1887: 369) は，OE weorðan[18] “to become” の過去形（下表）を例に引き，このように Verner の法則の作用によって生じた d と ð が交替が主因となって中英語期に d と ð (th) が混乱することになったと説いた．

1.sg.	2.sg.	3.sg.	pl.
wear**ð**	wur**d**e	wear**ð**	wur**d**on

だが，Skeat の「Verner の法則犯人説」は説得性を欠く．試みに，d/ð (< PIE *t) 以外に Verner の法則によって生じた古英語内での子音交替を整理してみると次表が得られ，印欧祖語の無声閉鎖音に端を発し，ゲルマン語において Verner の法則による有声化を受けた場合（網掛け部）と，さもない場合とで生じた子音交替が他にもさまざまあることが見て取れる．PIE *k^{w} のように，古英語の段階では，もはや交替が見えにくくなっている場合もあるとはいえ，もし Verner の

法則による子音交替によって (PIE *t >) d/ð の混乱が生じたのならば，同じくこの法則によって生じた (*p >) [v]/[b], (*k >) [x]/[ɣ], (*s >) [z]/[r] なども混乱を引き起こしてしかるべきである．さらに，PIE *kʷ の場合に Pre-OE *ɣw を古英語は [ɣ] ないし [w] の形で受け継ぎ，当時からゆれが存在したのだから，後に [ɣ]/[w] の混乱を残してもまったく不思議ではない．これらが生じていないのに[19] d/ð のみ混乱したということは，その原因が Verner の法則にないという傍証となり得るであろう．

PIE		Gmc.	Verner	Pre-OE	OE 例	OE 反映
*p	*kap-	*xaɸ-	*xaɸ-	*xæf-	hæfde [ˈhævde] “(I, he) had”	f [v]
			*xaβ-	*xæb-	habban [ˈhɑbbɑn][20] “to have”	b [b]
*k	*deik-	*teix-	*teix-	*tīx-	*tīohan > tīon, tēon[21] “to accuse”	(h [x])
	*doik-	*taix-	*taix-	*tāx-[22]	tāh [tɑ:x] “(I, he) accused”	h [x]
	*dik-	*tix-	*tiɣ-	*tiɣ-	tigon [ˈtiɣon] “accused” (pl.)	g [ɣ]
*kʷ	*sekʷ-	*sexʷ-	*sexʷ-	*sexw-	*seohwan > sēon “to see”	(hw)
	*sokʷ-	*saxʷ-	*saxʷ-	*sæxw-	*sæhw > seah “(I, he) saw”	h(w)
	*skʷ-	*suxʷ-	*suɣʷ-	*sœɣw-[23]	*seɣwen > sewen ～ segen “seen”	w [w] g [ɣ]
*s	*geus-	*keus-	*keus-	*kēus-	ċēosan [ˈʧe:ozan] “to choose”	s [z]
	*gous-	*kaus-	*kaus-	*kēas-	ċēas [ʧe:ạs] “(I, he) chose”	s [s]
	*gus-	*kus-	*kuz-	*kur-	curon [ˈkuron] “chose” (pl.)	r [r]

隣接鳴子音のかかわり

英語史に見られる d/ð (th) の交替に Verner の法則がもたらした混乱がかかわったとする Skeat の推理は誤りと考えるべきである．実際，ゲルマン祖語の時代に作用したはずの Verner の法則が暫時混乱を引き起こしたことがあったとしても，その混乱が恐らく 1000 年にもわたる沈静期を経た後，中英語の時代になっていきなり息を吹き返し，12 世紀には [ð] > [d] の推移を，15 世紀頃には逆の [d] > [ð] の推移を引き起こしたたとみなすことなど無理も甚だしい．その後 Verner の法則とのかかわりという着想を受け継いだ研究者が見当たらないのも当然であろう．

Skeat の説が世に問われた 22 年後，音声への造詣の深いコペンハーゲンの **Otto Jespersen** (1860-1943) は，それまでの研究の背景にこだわらず，d/ð の交替について音声環境と発生時期のみに着目した独自の所見を残した (1909: 208ff.). その骨子は下記 2 点にまとめることができる：

(3)　12 世紀頃，流音に隣接（主に後続）する [ð] は [d] に転じる傾向を示した

(4)　15 世紀頃，成節の流音と鼻音に先行する [d] は [ð] に転じる傾向を示した

まず (3) について検討してみたい．例えば OE swæðel は規則的な反映 ME swathel の他に，斜格に由来する異形 swathle をも生み出す．後者を考慮すれば，(3) は本来 ð に流音が隣接した ModE. afford, murder, needle, spider ばかりか burden, fiddle, rudder, staddle, swaddle の d(d) をも説明することになる．オックスフォードの Joseph Wright (1855-1930) も晩年に至りこれを追認した (1923: 117).

これに対し，イェーナの **Richard Jordan** (1877-1925) は遺作 (1925: 183) において OE [ð] に後続する流音と鼻音（i.e. 鳴音 resonant）が鍵と見た：

(5)　12 世紀頃，鳴音が後続する場合に [ð] は [d] に転じる傾向を示した

すなわち，Jordan は例えば OE byrðen においては ð に先行する r は無関係であって，異形たる ME burthne の n が [ð] > [d] を引き起こしたと考える．(5) は地名 Cuddesdon の [d] を辛うじて説明するものの，その代償に afford の [d] が説明できなくなる点は (3) に劣る．それにもかかわらず (5) がその後 Brunner (1973: 357) や Lass (1992: 64) をはじめ多くの追認を得ている現状は不可思議である．

以上より，(3) ないし (5) の代案として (6) を提案すべきと考える．下表に見られるように [ð] > [d] の該当例のほとんどはこれによってよく説明され，唯一の例外 OE cūðe > EME couthe > coude > ModE. could は類推によって説明される．[24]

(6)　12 世紀頃，鳴音が隣接する場合に [ð] は [d] に転じる傾向を示した

OE [ð]	EME [ð] > [d]	ModE. [d]	(3)	(5)	(6)	類推
byrðen	burthen > burden	burden	○	○	○	×
cūðe	couthe > coude	could	×	×	×	○
Cūð(wi)nes dūn	*Cuthnes- > *Cudnes-	Cuddesdon	×	○	○	×
fiðele	fithele > fidel	fiddle	△	○	○	×
ġeforðian	ifor*th*en > fur*d*e	afford	○	×	○	×
morðor	mor*th*er > mor*d*er	murder	○	○	○	×
nǣðl	*nē*th*le > nē*d*le	needle	○	○	○	×
rōðor	ro*th*er > ro*d*er	rudder	△	○	○	×
spīðra	spi*th*(e)re > spi*d*re	spider	○	○	○	×
staðol	sta*th*el > sta*d*el	staddle	○	○	○	×
swæðel	swa*th*el > swa*d*el	swaddle	△	○	○	×

他方，(4) は Wright (1924: 112; 1928[2]: 120), Jordan (1925: 252), Luick (1940: 1010), Brunner (1973: 357) 等々碩学の支持を得てすでに定説化している．これを発案した Jespersen (1909: 186ff.) は (OE fæder >) ME fader 等の e が早期のうちに [ə] に弱化し，これに鳴子音が後続する場合には，[ə] はさらに縮減して失われ，鳴子音が成節的 (syllabic) になったと見た．この観察に基づく (4) は下表に見られるように [d] > [ð] の例をことごとく説明する（garth と swarth については既述）．

OE [d]	LME [d] > [ð]	ModE. [ð]	(4)	ON influence
fæ*d*er	fa*d*er > fa*th*er	fa*th*er	○	×
ga*d*(e)rian	ga*d*(e)re(n) > ga*th*er	ga*th*er	○	×
(ġear*d*)	(yer*d*(e) ～ gar*d*in ～) gar*th*	gar*th* [θ]	×	○
hi*d*er	hi*d*er > hi*th*er	hi*th*er	○	×
hwi*d*er	whi*d*er > whi*th*er	whi*th*er	○	×
mō*d*or	mo*d*er > mo*th*er	mo*th*er	○	×
(swear*d*)	(swar*d*(e) ～) swar*th*(e)	swar*th* [θ]	×	○
—	te*d*er > te*th*er	te*th*er	○	×
tōgæ*d*(e)re	toge*d*er > toge*th*er	toge*th*er	○	×
þi*d*er	thi*d*er > thi*th*er	thi*th*er	○	×
we*d*er	we*d*er > we*th*er	wea*th*er	○	×

残された課題 ── 結語に代えて

以上のように，英語史に散発的に見られる [ð] > [d] ないし [d] > [ð] という例外的な発達は通時音韻論の観点から，ないしは部分的に類推と古ノルド語の影響によって一応の説明を与えることができる．

だが，その過程で想定される推移には何らかの合理的な音論的根拠が見出されねばならない．Jespersen (1909: 208f.) は，[ð] と [d] の交替に際し [d̪]，ないし彼が推奨した analphabetic notation を用いれば $\beta 0^{d}$，すなわち舌尖 (β) と門歯下端 (^{d}) で調音される閉鎖音 (0) ないし弱い破擦音を介したと考える．Jordan (1925: 252) や Luick (1940: 968) もこれを踏襲するが，これによって (4) と (6) が生じる過程が明らかになるわけではない．(4) は「後続する r への同化」だとする Prokosch (1939: 76) の安易な説明にも，(6) ないし (3) を [ð] の「強まり」，(4) を [d] の「弱まり」と捉える Lass (1992: 64) の素朴な説明にも不満を覚えるばかりである．いずれにせよ，(4) と (6) の発生理由は依然として謎に見える．

本稿で扱った問題については Jespersen にヒントを得たと考えられる Jordan の

説が過信され，ほぼ 90 年にわたり研究の進展が見られない．中島 (1951: 108f.) や中尾 (1972: 83f.; 1985: 386ff.) を含め関連文献の記述に不備が散見される現状はこうしてもたらされた．拙文により新たな研究が誘発されることを密かに祈る．

注

[1] OHG (h)leib (G. Laib), ON hleifr, Goth. hlaifs 等とともに Gmc. *xlaiβa-z にさかのぼるが，さらなる語源は不詳．OE brēad (< Gmc. *βrauða-m < PIE *bhreu-to- “(what is) cooked” < √ *bhreu(H)- “to cook”) は恐らく OE brēotan “to break in pieces” や brēoðan “to decay”（ともに √ *bher- “to cut” より）の影響により「小片」を表した．ただし，リンディスファーン福音書では Lat. pānis の注解に OE brēad が用いられており，ノーサンブリアではこの語は早期のうちから「パン」を表したらしい．

[2] Gmc. *warða- (cf. G. Warte “watch”, warten “to wait”) < *wor-to- (< PIE √ *wer- “to watch out”) にさかのぼる．英語は後に guard (< OF guarder) も借用した．William と Guillaume，war と F. guerre (cf. Sp. guerrilla) にも見られるように，古仏語はゲルマン語由来の [w] をしばしば [gʷ] (> [g]) として受け入れる．

[3] 19 世紀末より，ゲルマン語史ではこの音を χ と表記する習慣が半ば根付いている．本稿では誤解を避けるため IPA に準拠した x を用いる．

[4] [x] と異音 [ç] は中英語以来 gh と綴られ，今日まで多く綴りには残るが，音声的には失われた．その痕跡は daughter (OE [ˈdoxtor] > ME [ˈdoxtər] > [ˈdɔutər] > 米 [ˈdɔːtɚ], 英 [ˈdɔːtə]) や night ([niçt] > [niːt] > [naɪt]) のように，しばしば過渡的なわたり母音 [u] ないし先行母音の代償延長に残る．[f] として残った場合も多い (cou*gh*, drau*gh*t, lau*gh*, rou*gh*, tou*gh*, enou*gh*, chou*gh*)．[θ] として残った例外的現象が West Yorkshire の市名 Keighley [ˈkiːθlɪ] に見える．Cf. Brunner (1973: 364).

[5] 同様の [h] の脱落は hn-, hr- にも見られ，Smirnickij (1965: 54f.) 他も看破する通り，これらは [h] と融合して無声化した [l̥, n̥, r̥] の段階を経ていると考えられる．その傍証は OE hw- の推移に見られる．OE hw- はもともと文字通り [xw] と発音されたはずだが，h [x] が [h] を経て失われる過程において両要素を合一させた無声の [w̥] = [ʍ] となり，中英語以降 wh- と綴られる．[l̥, n̥, r̥] が早期のうちに通常の /l, n, r/ に合一した一方で，wh [ʍ] は近代英語まで保たれた．Cf. 神山（2008: 83）．

[6] 古英語では [v] は音素 /f/ が有声音の間に位置した場合の異音に過ぎず，[f] と同様に f によって表記された．だが 1066 年のノルマン人の征服以降，ノルマン・フレンチを話す写字生が到来し，[v] を u（後に v）で表記する習慣が移入された．

[7] hlǣf- (< hlāf) に続く要素は PIE *dheiĝh- “to knead and form” のゼロ階梯に起因する．その o 階梯から形成された *dhoiĝh-o- > Gmc. *daiɣa- > OE dāg は極めて規則的に ModE. dough に至る．すなわち lady は「パン生地作り人」を原義とする．

[8] 単数形第 1 音節の本来の音節核 i は w の影響で u となり，s*o*me, c*o*me, d*o*ne, n*o*ne, L*o*ndon 等々にも見られる通り，m や n の前後では判読が難しくなるため，u の代わ

りに o が半ば規則的に綴られた．これにより ModE. woman が得られる．複数形では第 2 音節に含まれる前舌母音の影響によって本来の i が保たれたが，単数形に準じて第 1 音節の綴り o が一般化して ModE. women に至る．

[9] South Oxfordshire の地名．七王国時代のウェセックス王子 Cuthwine の丘 (OE Cūðwines dūn) を原義とする．wi，次いで n の部分が失われて現在の形となる．

[10] th を持つ異形 (> ModE. † burthen) は Shakespeare には頻出する．

[11] [θ] > [t] についても触れられる：OE hēh*þ*a (ModE. heigh*t*), nos*þ*yrl (nos*t*ril), gesih*þ* (sigh*t*), stælwyr*þ* (stalwar*t*), þīef*þ*e (thef*t*)．ここでは「摩擦音＋摩擦音」の後者が閉鎖音に異化したと見られる．Cf. Jordan (1925: 182)．同様の環境における摩擦音の閉鎖音への異化はドイツ語に顕著だが，印欧祖語におけるラリンガルの「硬化」にも同じ現象が見える．Cf. Martinet (1955; 1956; 2003: 145, 168, 178ff.)，神山 (1995: 187f.; 2006: 69, 166, 202)．ただし，stælwyr*þ* については不詳．

[12] ModE. garden < ME gardin はフランク人がガリアの俗ラテン語に持ち込んだ ONF *gardin からの借用語．(O)F jardin は a の前での palatalization を経た．

[13] 現在普通の「芝生」(greensward) の語義は 1450 頃初出 (OED).

[14] 色黒であることを表す swarthy は OE sweart > ModE. swart (cf. G. schwarz, ON swartr) との混淆によると思われる．

[15] PIE *b = Gmc. *p はほとんど現れないが，紙面の制約のためその理由については Martinet (2003: 190), 神山 (2006: 28ff.) 等を参照．また，ここでは Grimm の法則の後に Verner の法則が生じたとする古典的な相対年代設定に従う．

[16] 本来的に第 2 音節の母音は短く，語尾 *-s が添えられたはずであり，*-s の脱落に伴い先行母音が代償延長したと考えられる．*pətēr についても同様．

[17] Gmc. *ð はすべての位置で OE d に対応するが，Gmc *β が OE b となったのは語頭と鼻音の後のみである．Gmc. *ɣ は鼻音の後で閉鎖音となったものの，摩擦音としての実現は長く保存され，語頭で閉鎖音 [g] が一般的となるのはようやく古英語の末期のことである．Cf. Smirnickij (1955: 77f.).

[18] < PIE *wert- “to turn” (cf. G. werden “to become”, Lat. vertō “I turn”, OCS vrьtǫ “I turn”)．直接の後裔は ModE. † *worth* (as in “*Woe worth the day!*”) である．

[19] 無論，本来語の w と（古）仏語由来の g が成す doublet は除外される．Cf. 注 2.

[20] Gmc. *a は OE æ に対応するが，この形態では後続音節の後舌母音 OE a [ɑ] によって語根母音が æ > a に後舌ウムラウト化している．

[21] 軟口蓋音 h [x] の影響で先行母音に後舌のわたり母音が生じ（「割れ」breaking），その後に縮約が生じている．後掲の sēon にも同じ現象が生じる．

[22] Gmc. *ai は OE ā [ɑː] に対応する．暫定的にこの推移を Pre-OE 期とみなした．

[23] 後続音節の前舌母音によって前舌ウムラウトを生じた形を記した．

[24] 古英語で cūðe (cunnan “to know”) と ūðe (unnan “to grant”) のみに用いられる過去の接尾辞 -ð- が，強変化以外のすべての動詞に現れる -d-（無声音の隣では -t-）に置き換えられた．恐らく両者とも PIE *-t- > Gmc. *-θ- に由来するが詳細は他所に譲る．16 世紀に綴り cou*l*d に *l* が加わったのは shou*l*d, wou*l*d の類推による．

Abbreviations

†	obsolete (literary) form	ME	Middle English
c	circa	ModE.	(Modern) English
EME	Early Middle English	OCS	Old Church Slav(on)ic
F.	French	OE	Old English (= Anglo-Saxon)
G.	German	OF	Old French
Gk.	Greek	OHG	Old High German
Gmc.	(Proto-)Germanic	ON	Old Norse
Goth.	Gothic	(P)IE	(Proto-)Indo-European
IPA	the International Phonetic Alphabet	Skr.	Sanskrit
Lat.	Latin	Sp.	Spanish
LME	Late Middle English		

参考文献

Blake, Norman (ed.) 1992 *The Cambridge History of the English Language*, Vol. 2: 1066-1476. Cambridge University Press, Cambridge.

Brunner, Karl 1960-1962 *Die englische Sprache: Ihre geschichtlische Entwicklung*. I-II. Max Niemeyer Verlag, Tübingen；松浪 有, 小野 茂, 忍足欣四郎, 秦 宏一訳 1973『英語発達史』東京：大修館書店.

Grimm, Jakob 1819, 1822[2] *Deutsche Grammatik* I. Dieterichsche Buchhandlung, Göttingen.

Holthausen, Ferdinand 1933; 1963[2] *Etymologisches Wörterbuch der altenglischen Sprache*. Winter, Heidelberg.

Jespersen, Otto 1909 *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part 1: Sounds and Spelling. Winter, Heidelberg.

Jordan, Richard 1925, 1934[2], 1968[3] *Handbuch der mittelenglischen Grammatik: Lautlehre*. Winter, Heidelberg.

Kamiyama, Takao（神山孝夫）1995『日欧比較音声学入門』東京：鳳書房.

———. 2006『印欧祖語の母音組織：研究史要説と試論』岡山：大学教育出版.

Lass, Roger 1992 Phonology and Morphology. in Blake (1992).

Luick, Karl 1940 *Historische Grammatik der englischen Sprache*. Erster Band, II. Abteilung. Bernhard Tauchnitz, Leipzig.

Martinet, André 1955 Le couple *senex-senatus* et le «suffixe» *-k-*. *BSL* 51.

———.1956 Some Cases of *-k-/-w-* Alternations in Indo-European. *Word* 12.

———. 1986, 1994[2] *Des steppes aux océans: L'indo-européen et les «Indo-Européens»*. Payot, Paris；神山孝夫訳編 2003『「印欧人」のことば誌：比較言語学概説』東京：ひつじ書房.

Nakajima, Fumio（中島文雄）1951『英語發達史』東京：岩波全書.

Nakao, Toshio（中尾俊夫）1972『英語史II』英語学大系第9巻, 東京：大修館書店.
———. 1985『音韻史』英語学大系第11巻, 東京：大修館書店.
Prokosch, Eduard 1939 *A Comparative Germanic Grammar*. Linguistic Society of America.
Rask, Rasmus Kristian 1818 *Undersögelse om det gamle Nordiske eller Islandske Sprogs Oprindelse*. Gyldental, Kjöbenhavn.
———. 1932 *Ausgewählte Abhandlungen*. I. Levin & Munksgaard, København.
Skeat, Walter William 1887, 1892[2] *Principles of English Etymology*. First series: The native element. The Clarendon Press, Oxford.
Smirnickij, Alexandr Ivanovič (Смирницкий, Александр Иванович) 1955 *Древне-английский язык*. Издательство Литературы на иностранных языках, Москва.
———. 1965 *История английского языка (средний и новый период): курс лекций*. Московский университет, Москва.
Ueno, Seiji（上野誠治）2010「ゲルマン祖語における子音変化について」『北海学園大学学園論集』145.
Verner, Karl 1877 Eine ausnahme der ersten lautverschiebung. *KZ* 23.
Watkins, Calvert (ed.) 1985, 2000[2], 2011[3] *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Houghton Mifflin Company, Boston.
Wright, Joseph & Elizabeth Mary Wright 1923, 1928[2] *An Elementary Middle English Grammar.* Oxford University Press, Oxford.
———. 1924, 1962[2] *An Elementary Historical New English Grammar*. Oxford University Press, Oxford.
Zoëga, Geir T. 1910 *A Concise Dictionary of Old Icelandic*. The Clarendon Press, Oxford.

http://bosworth.ff.cuni.cz/ (Bosworth-Toller Anglo-Saxon Dictionary)
http://quod.lib.umich.edu/m/med/ (The Middle English Dictionary online)

執筆者一覧　（掲載順）

有　村　兼　彬	甲南大学文学部教授
米　山　三　明	成蹊大学文学部特別任用教授
高　見　健　一	学習院大学文学部教授
福　井　直　樹	上智大学大学院言語学専攻教授
大　室　剛　志	名古屋大学大学院文学研究科教授
金　子　義　明	東北大学大学院文学研究科教授
西　岡　宣　明	九州大学大学院人文科学研究院教授
森　岡　裕　一	大阪大学大学院文学研究科教授
服　部　典　之	大阪大学大学院文学研究科教授
片　渕　悦　久	大阪大学大学院文学研究科教授
石　割　隆　喜	大阪大学大学院文学研究科准教授
Paul A.S. Harvey	大阪大学外国人教師
神　山　孝　夫	大阪大学大学院文学研究科教授
由　本　陽　子	大阪大学大学院言語文化研究科教授
松　本　マスミ	大阪教育大学教育学部教授
加　藤　正　治	大阪大学大学院文学研究科教授
高　橋　眞　理	京都産業大学外国語学部教授
前　川　貴　史	龍谷大学社会学部准教授
香　本　直　子	石川工業高等専門学校講師
吉　本　真由美	実践女子大学文学部助教
田　中　裕　幸	関西学院大学商学部教授
藤　井　友比呂	横浜国立大学環境情報研究科准教授
川　原　功　司	名古屋外国語大学外国語学科准教授
村　田　和　久	大阪学院大学外国語学部講師
今　西　祐　介	関西学院大学総合政策学部助教
本　田　隆　裕	大阪府立島本高等学校教諭
嶋　村　貢　志	コネチカット大学大学院
田　中　秀　治	大阪大学文学研究科博士後期課程
濱　本　秀　樹	近畿大学文芸学部教授
田　中　英　理	大阪医科大学医学部講師
西　口　純　代	東京理科大学経営学部講師
大　森　文　子	大阪大学大学院言語文化研究科准教授
早　瀬　尚　子	大阪大学大学院言語文化研究科准教授
谷　口　一　美	京都大学大学院人間・環境学研究科准教授
堀　田　優　子	金沢大学人間社会研究域准教授
高　木　宏　幸	近畿大学文芸学部教授

米　倉　よう子	奈良教育大学教育学部准教授
町　田　　章	広島大学大学院総合科学研究科准教授
岩　崎　真　哉	大阪国際大学国際コミュニケーション学部講師
南　　佑　亮	神戸女子大学文学部准教授
北　爪　佐知子	近畿大学文芸学部教授
吉　村　あき子	奈良女子大学研究院人文科学系言語文化学領域教授
春　木　茂　宏	近畿大学文芸学部准教授
千　田　　愛	立命館大学非常勤講師
岩　橋　一　樹	摂南大学外国語学部非常勤講師
黒　川　尚　彦	大阪工業大学工学部講師
梅　原　大　輔	甲南女子大学文学部教授
田　岡　育　恵	大阪工業大学情報科学部教授
岡　田　禎　之	大阪大学大学院文学研究科教授
甲　斐　雅　之	京都女子大学文学部准教授
森　　英　樹	福井県立大学学術教養センター講師
大　川　裕　也	札幌大学地域共創学群准教授
平　川　公　子	近畿大学薬学部非常勤講師
篠　原　弘　樹	松陰中学校高等学校教諭

言葉のしんそう（深層・真相）
──大庭幸男教授退職記念論文集──

2015 年 3 月 25 日　印　刷　　2015 年 3 月 30 日　発　行

著　　者 © 大庭幸男教授退職記念論文集刊行会
代　　表　岡　田　　禎　之
〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5
大阪大学文学部英語学研究室内

発 行 者　佐 々 木　　元

発 行 所　株式会社　英　　宝　　社
〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-7-7
第一井口ビル
TEL 03 (5833) 5870-1 FAX 03 (5833) 5872

ISBN 978-4-269-77052-2 C1082
［製版：伊谷企画／印刷：(株)マル・ビ／製本：(有)井上製本所］

定価（8,000円＋税）